



宇和島城通信

11

2019.3



昨年度、JT 宇和島営業所跡地で、発掘調査を実施しました。宇和島城は市民の皆さんから「お城山」の名称で親しまれていますが、城の構えとしては麓の御殿や追手門、堀といった場所も含めて、「平山城（ひらやまじろ）」という造りとなります。平地部分での、大規模な調査は今回が初めてとなりました。

【上の写真】発掘調査地を俯瞰的に撮影したものです。大きな石の列がいくつも見えますが、これは江戸時代の城に関係するものではなく、明治以降に建てられた学校関係の施設の基礎石であると考えています。

【左の写真】黒く焦げているような部分や炭がみえるかと思いますが、今回の発掘調査で複数確認された「鍛冶（かじ）」をしていたことを示す痕跡の一つです。これは江戸時代に、この場所で、建物などに使用する釘などの金具を製作していたのではないかと考えています。

■ JT 宇和島営業所跡地（作事所跡）の調査

宇和島城の南山麓にある JT 宇和島営業所跡地は、平成 28 年 3 月 1 日に宇和島城の国史跡指定地に追加指定をされました。この場所は江戸時代には「作事所（さくじしょ）」という藩の施設と上級武士の屋敷地として使われていました。そして、平成 28 年度に国からの補助をうけて、その用地を市が買上げ、平成 29 年度に発掘調査を実施しました。



宇和島城絵図（正徳元（1711）年）

公益財団法人宇和島伊達文化保存会

【上】伊達家に伝わる城絵図の多くは、堀まで描かれています。江戸時代の人たちも平山城と認識していたことが分かります

【右】追加指定地あたりの拡大（上の図の赤丸部分）です。いろいろな建物が建てられていたことが伺えます。



宇和島城下絵図屏風 部分 元禄末（1700）年頃

〔宇和島市立伊達博物館 蔵〕 ※赤点線枠が発掘調査箇所の想定範囲



宇和島第二尋常小学校（昭和3年時の写真）

◆調査地の来歴と経緯

藤堂高虎が宇和郡に入った慶長元(1596)年より武家屋敷として使われ、宇和島伊達家2代藩主宗利による城郭改修によって作事所となり幕末まで使用されました。明治以降は学校用地となり、昭和20年に空襲を受けるまで使用されました。戦後は日本専売公社（後の日本たばこ産業株式会社、略称：JT）の営業所として使用されていましたが平成27年に閉所となりました。

◆作事所とは

「作事奉行 城郭を始めとし一切の建築営繕のことを管掌し、又領内此の種の職工業者に関する事件を管掌したるが如し」-『宇和島吉田両藩史』愛媛教育協会北宇和部会（1917）より

⇒大工・大工仕事にかかわる物事を統括する作事奉行の役所・作業所

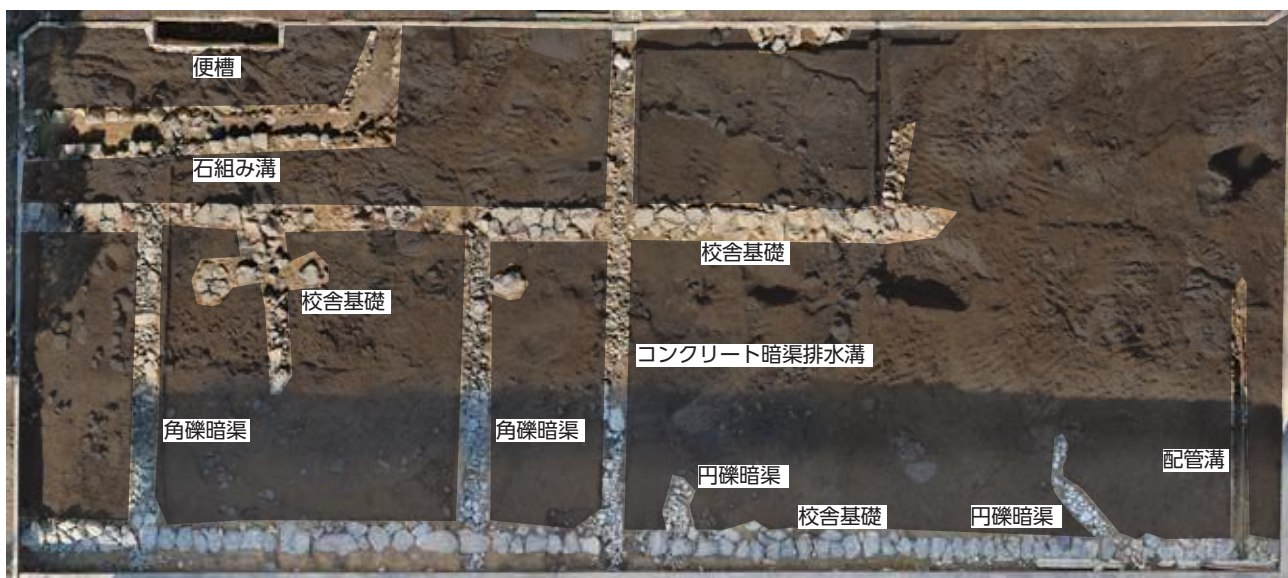
※井戸丸井戸杵石組みに残る碑文からは作事奉行の下に作事所役人、大工、棟梁、石工頭などが作業したことがわかります。



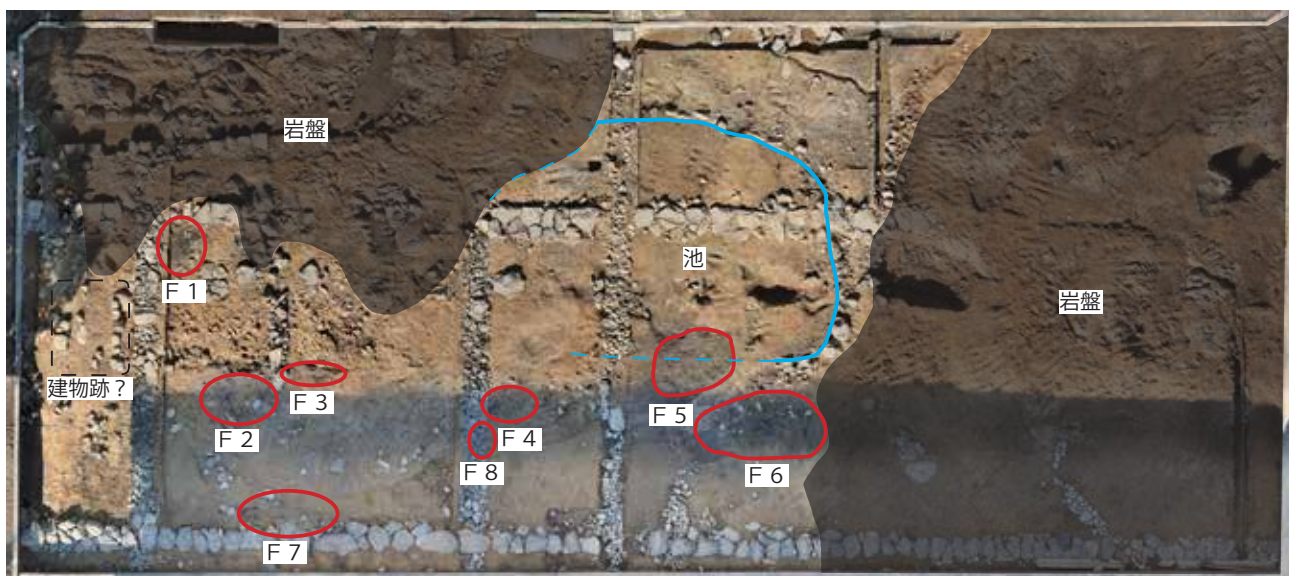
宇和島城井戸丸井戸杵の碑文

◆調査成果

今回の調査では、日本たばこ産業の建物・構造物、第二尋常小学校の校舎・溝、作事所の遺構が確認できました。下の二つの写真図は明治以降と江戸時代の痕跡をそれぞれ示したものです。



明治以降の建物などの痕跡



江戸時代の痕跡 ※ F ○ は鍛冶の痕跡の箇所

◆各時代の痕跡について

◎JT宇和島営業所の遺構：暗渠排水溝・配管溝・円礫暗渠

◎学校施設の遺構：校舎基礎・石組溝・角礫暗渠・便槽

◎作事所の遺構：池・鍛冶関連遺構・礎石

調査地の北西側と東側は明治より後に岩盤を削って平坦にしていましたので、作事所跡の遺構が確認できたのは調査地中央から南西側の範囲でした。調査地中央では半円形に石列が並び、北西側の終わりは石材一段で岩盤に取り付いており、東側では二段積みの石組みとなっていました。池を埋めた土の中からは伊達家定紋「竹に雀文」と考えられる瓦や、加工木材が出土し、杭列や丸太を組んだ木組も確認しました。江戸時代の絵図では円形に描かれた部分に相当し、この池を示していたものと推測しています。用途としては作業用水の確保や木材の貯蔵などが考えられますが、東西に岩盤が迫り谷地形となっているため、城山からの流水を管理するためのものとも考えられます。



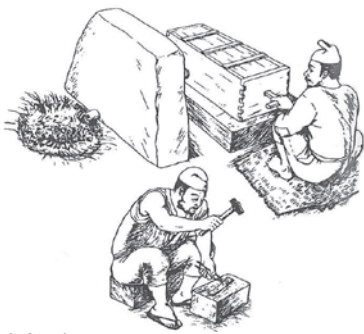
家紋瓦破片



2段積の石組

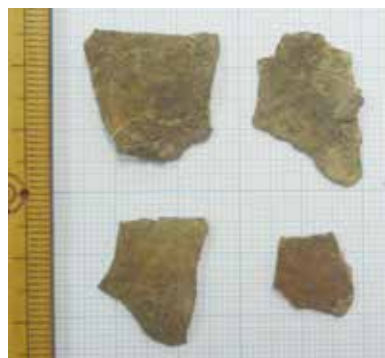
◆鍛冶と関係遺物について

鍛冶には大鍛冶と小鍛冶があります。大鍛冶は砂鉄や鉄鉱石から鉄を造ること、小鍛冶は釘や刃物などの鉄の製品を作ることと言います。今回の調査で、鍛造薄片・鉄滓・炉壁等が出土、本作事所では小鍛冶が行われていたことが分かりました。鍛造薄片は熱した鉄を金槌でたたいた際にはがれる鉄片です。高温で鍛冶を行うと大きな破片がはがれるためF1付近には高温操業の鍛冶炉があったものと推定できます。鉄滓は鍛冶で鉄を熱した際に鉄より低い温度で溶け出す金属などが鍛冶炉の底にたまったものです。鍛冶炉の一番底にたまるものはお椀の形となるため椀形滓といいます。F8付近では大型の椀形滓が出土しており、大きな鍛冶炉があったことが推定できます。炉壁は鍛冶炉や火よけの壁です。火の起こる面（内面）は熱を受けて土が溶けたり、鉄滓が付着したりします。今回の調査ではふいごの羽口が出土しませんでした。F6出土の炉壁に直径3cmほどの円形の穴が開いていたことが確認できたことから火よけの壁に直接穴を空けてふいごから風を送っていたことが分かりました。



小鍛冶の風景

出典：潮見浩 1988『技術の考古学』



鍛造薄片（たんぞうはくへん）



椀形滓（わんがたさい）

◆まとめ

作事所では、絵図で確認できた木材加工と、これまで知られていなかった鍛冶が行われていることが分かりました。生産されていたものは調査では釘など小型のものしか出土していませんが、出土品から大規模で多様な鍛冶が行われていたことが分かりました。鍛冶が行われた時代も①池が使われていた時代、②池が埋まったあとなど複数の時代のものが確認でき、継続して鍛冶場であったことが分かりました。今後JT宇和島営業所の跡地は、これらの出土品をはじめとした宇和島城関係資料の整理や調査を行う事務所として当面は使用する予定で、具体的な整備については今後検討していきます。

■ 問合せ先

教育委員会 文化・スポーツ課 文化財保護係 【Tel】 49-7033 【Fax】 22-5058 【Mail】 bunka@city.uwajima.lg.jp